HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『詩品』と「雑体詩」における陶淵明 : 「中品」という評価をめぐって
Author(s)	熊, 征
Citation	研究論集, 18, 77 (左) -107 (左)
Issue Date	2018-12-26
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.18.l77
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72438
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_007_xiong.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgsl.18.l 77

『詩品』と「雑体詩」における陶淵明

――「中品」という評価をめぐって――

熊　　征

要　旨

中国文学史上初めての詩論専著である『詩品』において，陶淵明が「中品」にランク付けられたことは従来議論されている点である。日本と中国の陶淵明研究の学界に大きな反響を呼んだ岡村繁氏の『陶淵明：世俗と超俗』にもこれについての論述がある。岡村氏によると，斉梁時代における陶詩はその前の時代と比べると評価が低く，一流の詩人として見られていない。根拠として，当時の貴族階層の代表者である蕭統と蕭綱が彼の人徳だけ慕っていることと，『詩品』における「中品」の評価などを挙げている。また『詩品』と継承の関係を持つ「雑体詩」の作者江淹も陶淵明を「中品」程度の詩人と見ている可能性が大きいと推測している。

本稿は岡村氏の論点から出発し，「雑体詩」と『詩品』の関係についての先行研究と「中品」をめぐっての先行研究を踏まえた上で，斉梁時代における文学背景を考察し，鍾嶸と江淹の文学観及び『詩品』と「雑体詩」における陶詩評価の真相の究明を試みた。その結果は次の三点にまとめられる。

①「質」より「文」の方を極端に重視する斉梁時代では一般評価として，陶詩は確かに評価されていない。ただ，二蕭の陶淵明評価として，人徳を慕っているだけではなく，詩文そのものへの愛好も十分にある。

②『詩品』における「中品」のランク付けは，まず，陶詩をランク付けの対象に入れたこと自体に意義があり，さらに，品語から見ると，「文」と「質」の均衡を重視する文学観を持っている鍾嶸は陶詩が「文」と「質」を兼ね備えている点を高く評価しており，「隠逸詩の宗」という評価も彼の地位を肯定しているものである。

③『詩品』と「雑体詩」とでは，取り扱う対象と陶詩への評価など一致している点が見える。ただ，江淹は「兼愛」の詩観を持っているので，ランク付けの意識はなく，江淹も陶淵明を「中品」程度の詩人と見ているとすることは難しい。「文」より「質」の方を重視している彼は陶詩の質の充実に親近感を持っており，彼の詩文に潜んでいる隠逸思想も陶詩からの影響を受けてい

る可能性が高い。

はじめに

日本と中国において，陶淵明（約 365～約 427）[1] はその没後今に至るまで 1500 年あまりの間ずっと関心を持たれていたが，特に第二次大戦終了後には，陶淵明に関する研究論文や著書の量が一気に増えた。就中，1973 年には，日本で陶淵明に関する著書が 3 冊も出版された。11 月に，都留春雄氏の『陶淵明』（筑摩書房），ついで翌月に，岡村繁氏の『陶淵明：世俗と超俗〈NHK ブックス 224〉』（日本放送出版会）（以下『陶淵明：世俗と超俗』と略す）と中谷孝雄氏の『わが陶淵明』（筑摩書房）が世に出た。この時期の日本における陶淵明への関心の高まりが窺える。その内，岡村繁氏の「従来の陶淵明像を徹底的に否定した」[2]『陶淵明：世俗と超俗』はその「特異」な意見により，学界に一気に波紋を広げた。岡村繁氏が本のあとがきで書いているように，この書の骨子となる論文「陶淵明論――その超俗的生活を支えた世俗性」が発表された際，「学界の評価は，賛否ほとんど相半ばしたが，ありがたいことに反響は意外に大きかった。」[3]

この本が出版された翌年，矢淵孝良氏は書評で次のように批評している。

> すなわち従来「超俗の士」という性格で語られていた淵明が，実は最も世俗性の強い「利己主義者」であり，その隠逸生活も利己主義者の「自己本位」な生き方の表われにすぎないと説かれるのである。この「淵明＝利己主義者」という規定は本書を一貫して流れる主題であり，淵明の詩文の解釈に際して常に著者の念頭に置かれるところである。この明快な淵明像の規定は読者に一種の爽快感を与える。と同時に，かく淵明像が規定されたとしても，実際に淵明の詩文に表われた彼の複雑さが，その規定だけで説明しきれるだろうかという疑念もまた一方に生ずる。[4]

そして，矢淵氏は，「淵明＝利己主義者」という人物像の説明と具体的な詩文分析における岡村氏の論証の不十分さに対しても批判を加えている。

反対意見を浴びたにもかかわらず，岡村氏の特異ではありながら，興味深い観点とその率直な表現はやはり多くの人の関心を引いた。この本は，1992 年 11 月陸暁光，笠征両氏により中

1　生卒年について，没年は一致を見ているが，生年に関しては 352 年生まれの享年 76 歳説と 372 年生まれの享年 56 歳，また 376 年生まれ享年 52 歳などの諸説がある。いずれも理由とするところが十分確信できるものがない。

2　矢淵孝良「書評　岡村繁『陶淵明　世俗と超俗』」，『中国文学報』，第 25 冊，中国文学会，1975 年 4 月，90 頁

3　岡村繁著『陶淵明：世俗と超俗』，日本放送出版協会，1973 年 12 月，234 頁

4　矢淵の前掲書評，90 頁

国語に翻訳され，『世俗與超俗』[5] という書名で台湾に伝わった。さらに 10 年後，中国大陸で『岡村繁全集 04　陶淵明李白新論』[6] という本に収録，出版され，読者の範囲がより一層広がっている。この本を通して岡村氏により新たに提起された陶淵明像に対して，現在の人々がいかに理解，受容しているのかを確認することによって，新世代の陶淵明研究の傾向を知ることができる。

『陶淵明：世俗と超俗』で岡村氏は，陶淵明の隠逸生活への態度と性格上の「拙」なさに対する心境，及び生活の貧富についての描写等々の相矛盾する点を取り上げ，「淵明像」を構成するにあたって重要な役割を果たした陶淵明の作品と後世の文献と現実との食い違いを指摘し，従来の象徴的な符号 ──「超俗」を否定し，その「高潔無欲な隠逸詩人」[7] のイメージの裏側に潜んでいる世俗性を鋭く抉り出した。この本において，岡村氏は陶淵明の人柄を中心に論じていたが，最後の第 6 章「人と文学」では，「淵明の文学が，もしすぐれた価値をもつのであるとするならば，その価値は，従来のように，文学的見地から改めてこれを評価しなおさなければならないのではないだろうか。それは，あたかも漱石の小説や啄木の短歌に対する価値評価が，作者の人格や行動と一応無関係に行われるのと同様である。」[8] と，人と文学を分ける価値評価を提唱する。では，岡村氏は陶淵明の詩文に対していかに評価しているのであろうか。

「そして事実，このように奥床しく慕わしい陶淵明の人柄をしのぶよすがとして，多くの人びとは『五柳先生の伝』『桃花源の記』『帰去来の辞』といった脱俗的な文章や『菊を采る東籬の下，悠然として南山を見る』という清澄な詩句など，彼自身の筆になる極めて有名な詩文のいくつかを直ちに思い起こすことができるであろう。」[9] と「序文　あこがれの隠逸詩人」において陶淵明の文学の独特性と影響力を肯定した。そして，人格にはマイナスな評価を行った後でも，「淵明の詩文は，素朴ですがすがしく，読む人の心を打つものが多い。そして，そうした彼の清澄な詩文を読むにつけて，われわれは，かかる詩文をものした作者の姿を想像し，その美しい理想像に自分のあこがれを託そうとしたいものである。」[10] と第 6 章の中でその詩文に対しては依然として高く評価しているように見える。

上記のような岡村氏の陶淵明評価について，日本と中国の反響から見ると，目線はほとんど陶淵明の人格に関する評価の方に向いている。その意見の斬新さを認め，従来の陶淵明像の見直しにとっての価値を評価する人がいるのに対して，その論点が奇抜でありながら，論証が客観的ではない点と論拠の不十分なところには疑問を持つ意見も出された。確かに『陶淵明：世俗と超俗』全体の構成から見ると，人格に関する観点は岡村氏が最も集中的に論じた点であり，

5　岡村繁著，陸暁光・笠征訳『世俗與超俗』，台湾書店，1992 年 1 月

6　岡村繁著，陸暁光・笠征訳『岡村繁全集 04　陶淵明李白新論』，上海古籍出版社，2002 年 10 月

7　『陶淵明：世俗と超俗』，29 頁

8　『陶淵明：世俗と超俗』，226 頁

9　『陶淵明：世俗と超俗』，8 頁

10　『陶淵明：世俗と超俗』，226 頁

批判の元にもなっているところであるが，それだけで彼の陶淵明像を把握するのは不十分である。「人」と「文学」を分けて理解してほしいということを呼びかけている岡村氏の見解についてはその「文学」の観点とその論述の角度も重視すべきではなかろうか。そこで，本稿では岡村氏の陶詩への評価を中心として考察したい。

一，先行研究について

岡村氏は「序章　あこがれの隠逸詩人」で，陶淵明の「栄利貧窮にも恬淡として，心静かに郷里で田園生活を楽しんだ隠逸詩人であったといわれる。また彼は，読書を好み，酒を嗜み，世俗の巧智を避けて，ひたすら自然の純朴を慕いつづけた生活詩人であったといわれる」[11] というイメージの成立にあたって，詩文の働きを重点的に説明した。その内，最もわれわれに親しまれている「五柳先生の伝」「桃花源の記」「帰去来の辞」と「飲酒」第五首 ──「菊を采る東籬」を取り上げ，「後世の人びとの淵明像の形成に決定的な影響を与えた作品」[12] として，従来清澄な詩文と高潔な人柄で称賛を得た陶淵明像を構成する基盤であるとした。

しかし，時代別で見ると，中国では上記のような詩文も人格も，その憧れの陶淵明像が完全に定まったのは宋以降のことで，それに至るまでの陶淵明像には，様々なずれがあったことについて，岡村氏は詳しく述べている。それをまとめると，下記の表のようになる。

評価の点 / 時代	人格	詩文
死後～劉宋年間	◎	◎
斉梁	◎	△
唐	◎	○
宋	◎	◎

（△，○，◎の順で評価が高い）　（表の一）

隠者として知られ，各時代でもその人柄は評価されていたが，文学においては決してずっと高く評価されていたわけではないとのことである。特に「字句の彫琢に美を競い，繊細な感覚に妍を争う，精巧華麗な作風が支配的であった」[13] 梁朝時代では，陶淵明の詩文は「一種の素朴

[11] 『陶淵明：世俗と超俗』，30 頁
[12] 『陶淵明：世俗と超俗』，12 頁
[13] 『陶淵明：世俗と超俗』，42 頁

な泥臭さ」[14]で「まるで世界のちがう異質なものである」[15]という存在であった。具体的には当時，陶淵明を愛好した貴族達の態度から分かることであるとのことである。その例として，昭明太子の蕭統（501～531）が，『文選』に収めた陶淵明の詩文はいずれも「隠者にふさわしい，恬淡無欲な心境の作品ばかり」[16]であり，詩文を愛好するのも人徳を偲ぶためで，「道徳的・政治的な風教の面にこそ直結する性質」[17]を持っているという淵明への態度を示している。一方，簡文帝蕭綱（503～551）も「文学作家として，淵明を顔延之や謝霊運ほどには高く評価していなかった」[18]という態度を示している。以上のように岡村氏は説明している。

そして，岡村氏が梁の時代において，「詩人として必ずしも最高級の評価を受けていなかったらしいこと」[19]の裏づけとしたのが鍾嶸（約 468～518）の『詩品』と江淹（444～505）の「雑体詩」三十首である。『詩品』では淵明を「中品」にランクし，そして，このようなランク付けは「必ずしも（鍾嶸の）独創的なものではなく，おおむね当時一般の定評に従った」[20]のであるとした。その理由としては「江淹の『雑体詩』三十首に取り上げられた詩人三十家（最初の一首が作者不明の『古詩』）を，鍾嶸の『詩品』と照合してみると，その三十家のほとんどは『上品』と『中品』とに所属する詩人であって，特に『上品』の十余家は江淹が取り上げた詩人の中に一人残らず入っている」[21]からである。さらに，「江淹も，いちおう淵明を古今の著名詩人三十家の内に数え上げたとはいえ，その実際の評価は，だいたい『詩品』の品等づけと同様に，彼を『中品』程度の詩人と見ていた可能性が大きいように思われる」[22]と推測した。こういう岡村氏の陶詩への評価は確かに興味深いことではある。ただ，残念なことに，紙幅の制限によるのかもしれないが，詳細な論証がなされていない。

江淹「雑体詩」の順番に沿って，擬作対象として取り上げた作者不明の古詩以外の二十九名の詩人を鍾嶸の『詩品』と照合して，表にすると，下記の通りである。[23]

---

[14] 『陶淵明：世俗と超俗』，44 頁
[15] 『陶淵明：世俗と超俗』，44 頁
[16] 『陶淵明：世俗と超俗』，45 頁
[17] 『陶淵明：世俗と超俗』，47 頁，傍点は原著書による
[18] 『陶淵明：世俗と超俗』，47 頁
[19] 『陶淵明：世俗と超俗』，49 頁
[20] 『陶淵明：世俗と超俗』，50 頁
[21] 『陶淵明：世俗と超俗』，50 頁
[22] 『陶淵明：世俗と超俗』，50 頁
[23] 表の作成にあたって，興膳宏氏の『中国文明選第十三巻　文学論集』（荒井健・興膳宏著『中国文明選第十三巻　文学論集』，朝日新聞社，1972 年 5 月）の 85 頁と鳥羽田重直氏の「雑擬詩考」（『和洋国文研究 36』，2001 年 3 月，42～52 頁）の 46 頁の表を参照した。そして，生没年に関しては『中国文学大辞典』（銭仲聯総主編，上海辞書出版社，1997 年 7 月）の「魏晋南北朝文学」（109～163 頁）を参考した。また，湯恵休の「怨別」について，『文選』巻三十一では「別怨」となっている。

名前	擬詩の句数	「雑体詩」の標題	『詩品』での内容概括	時代	生没年	『詩品』でのランク
李陵	10	従軍		漢	(？～前 74)	上
班婕妤	10	詠扇		漢	(約前 48～約 2)	上
曹丕	18	遊宴		魏	(187～226)	中
曹植	18	贈友	贈弟	魏	(192～232)	上
劉楨	14	感遇	思友	魏	(？～217)	上
王粲	24	懐徳	七哀	魏	(177～217)	上
嵇康	24	言志	双鸞	晋	(223～262)	中
阮籍	10	詠懐	詠懐	晋	(210～263)	上
張華	12	離情	寒夕	晋	(232～300)	中
潘岳	24	述哀	倦暑	晋	(247 ― 300)	上
陸機	22	羇宦	羇宦	晋	(261～303)	上
左思	18	詠史	詠史	晋	(約 250～305)	上
張協	14	苦雨	苦雨	晋	(約 255～約 310)	上
劉琨	24	傷乱	感乱	晋	(271～318)	中
盧諶	24	感交		晋	(284～350)	中
郭璞	14	遊仙	詠仙	晋	(276～324)	中
孫綽	22	雑述		晋	(314～371)	下
許詢	20	自序		晋	生没年不詳	下
殷仲文	14	興矚		晋	(？～407)	下
謝混	16	郊遊	離宴	晋	(？～412)	中
陶潜	14	田居	詠貧	晋	(約 365～427)	中
謝霊運	28	遊山	山泉	宋	(385～433)	上
顔延之	28	侍宴	入洛	宋	(384～456)	中
謝恵連	40	贈別	擣衣	宋	(397～433)	中
王微	14	養疾	風月	宋	(415～約 443)	中
袁淑	24	従駕		宋	(408～453)	中
謝荘	18	郊遊		宋	(421～466)	下
鮑照	20	戎行	戎辺	宋	(約 414～466)	中
恵休	14	怨別		斉	生没年不詳	下

（表の二）

『詩品』と「雑体詩」の関係について，興膳宏氏が『中国文明選第十三巻　文学論集』で「鍾嶸の列挙した作家と比較して，さほど極端な異同は見られないものの，やはり二人の好みのちがいがところどころうかがえて興味深い。「雑体詩」は五世紀の末までには完成していたものとみられ，すくなく見つもっても『詩品』に約十五年は先行しているから，鍾嶸が作家・作品を選ぶにあたって，これを参考にしたことは十分想像できる。ことに二字で作品の内容を概括しようとする点は，江淹にならった可能性が強い。」[24] と述べ，『詩品』と「雑体詩」に踏襲の関

係が存在する可能性を肯定し，そして鍾嶸と江淹に詩の評価にかかわる好みの違いがあることも指摘している。

それでは，「雑体詩」と『詩品』から，江淹と鍾嶸の詩においてどのような「好みの違い」が見出せるのか。今までの研究から見ると，主に二点ある。

1）詩観の違い。江淹の「雑体詩」は彼自身の詩作集であるが，文学批評とも見られている。例えば，森博行氏が「江淹『雑体詩』三十首について」で次のように述べている。

> 結論的にいえば，彼が「雑体詩」三十首において意図したものは，彼自身の思想や感情をそこに寄託しようとすることではなく，実は漢代の作者不明の「古詩」以下，劉宋の休上人（湯恵休）に至るまでの三十人の詩を対象に，その詩人たちの詩的本質を五言詩によって，つまり創作によって記述しようとしたものなのである。だから，これは詩による文学批評乃至は詩史とでもいうべき性質をおびており，高橋和己氏の言葉を引用すれば，「詩の列伝」[25]とでも呼ぶべき性質のものである。[26]

文学批評という性質は『詩品』と共通しているが，方法論は異なっている。江淹は「雑体詩」の序文において「方に通じて恕を広め，遠きを好みて兼愛す（通方広恕，好遠兼愛）」[27]と述べているように，「兼愛」の詩観を持ち，包容性を重視している。それに対して，鍾嶸は「詩品序」で「昔，九品もて人を論じ，『七略』もて士を裁し，校するに賓と実とを以てすれば，誠に未だ直（あた）らざるもの多し。詩の技為るが若きに至つては，較爾として知るべし。類を以て之を推せば，殆ど博弈と同じ。（昔九品論人，『七略』裁士，校以賓實，誠多未直。至若詩之為技，較爾可知。以類推之，殆同博弈。）」[28]と述べて，詩の批評における品等付けの重要性を強調している。

2）創作目的の違い。創作の出発点として，それぞれの序文から見ると，江淹は，「世の諸賢，各々迷ふ所に滞る（世之諸賢，各滞所迷）」[29]と述べ，鍾嶸は「軽（かる）がるしく清濁を辨彰し，利病を

---

[24] 前掲，『中国文明選第十三巻　文学論集』，84～85 頁

[25] 高橋和己「江淹の文学」，「吉川幸次郎博士遺体記念論文集」（1968 年）所収

[26] 森博行「江淹「雑体詩」三十首について」，『中国文学報』27，1977 年 4 月，2 頁

[27] 梁・江淹撰『梁江文通文集』（上海商務印書館縮印本），巻四，四部叢刊初編，集部，台湾商務印書館，1967 年 9 月，28 頁。「通方広恕」と「好遠兼愛」は仏典から取った言葉である，『大正新修大蔵経』（高楠順次郎編『大正新修大蔵経』，大正一切経刊行会）第五十冊の史伝部，宋高僧伝三十巻，第十六巻の「唐京師章信寺道澄伝」によると，「澄曰，出家者可滞一方乎。西域三時分房俾無貪著。観門易立矣。不然者豈通方広恕乎。」（806 頁）また，第二十九巻の「唐京兆千福寺雲邃伝」によると，「好遠汎愛，人無間然。」（894 頁）

[28] 高松亨明著，『詩品詳解』，中国文学会，1926 年 12 月，18 頁。（詩品には，定本として全面的に信頼できるテキストが実はない。本文は，引用文献を高松亨明の『詩品詳解』を用いる。当書の底本として，上巻序は『梁書』の鍾嶸伝の所引であり，それ以外は古直の『鍾記室詩品箋』，許文玉の『詩品釈』，陳延傑の『詩品注』（人民文学社版），杜天縻『広注詩品』，中西淡淵校訂本と郭紹虞教授の著者あて書翰である。本文の参考テキストとして，陳延傑の『詩品注』（人民文学出版社，1980 年 2 月），周振甫の『詩品訳注』（中華書局，1998 年 2 月）がある。）

掎摭せんと欲す（軽欲辨彰清濁，掎摭利病）」[30]と述べており，いずれも詩の発展状況を憂えている。ただ上記の詩観の差の影響もあり，江淹の創作目的は高橋和己氏の言葉のように「詩の列伝」として，当時優れていると思われる詩人を自分の擬詩で記録し，各詩人の優れているところを示し，「甘きを論ずれば則ち辛きを忌み，丹を好めば則ち素きを非る（論甘則忌辛，好丹則非素）」[31] という「迷ふ所」を払うことを目的としている。鍾嶸の場合，「準的」を定め，品等を付け，高下を分けることを重視し，「闕喪」している詩風を回復させることを目的としている。

このような違いがある以上，二人の陶淵明についての評価も必ずしも一致するとは言えないことが分かる。特に江淹も鍾嶸と同じように陶淵明を，（岡村氏が述べているように）「中品程度の詩人と見ていた可能性が大きい」とは推測しにくい。

鍾嶸が陶淵明を「中品」にランク付けたことは，宋以来，よく非難された点である。その経緯と内容について，曹旭氏は『詩品研究』[32] において詳しく述べている。彼のまとめによると，代表的な意見として 4 点ある。1）陶淵明を「中品」に置くのが公平ではない。つまり「上品」に置くべきである。例えば明の閔文振（生没年不詳）の『蘭荘詩話』，清の沈徳潜（1673～1769）の『説詩晬語』と王士禛（1634～1711）の『漁洋詩話』，また日本の近藤元粋（1850～1922）の『蛍雪軒叢書』にはこのような意見が見える。2）陶詩の価値を見抜く能力において，鍾嶸は二蕭（蕭統と蕭綱）に劣っている。例えば，銭鍾書氏も『談芸録』において「当時淵明を理解，推賞する者は，ただ蕭氏兄弟のみである（当時解推淵明者，惟蕭氏兄弟）」[33] と述べている。3）陶淵明は元々「上品」であって，後「中品」になったのは，『詩品』が伝わっているうちに，誤りが生じただけである。ただし，これについて銭鍾書氏はすでに『談芸録』の第二十四章「陶淵明詩顕晦」で根拠の足りなさを指摘している。4）陶淵明の品語の中「古今隠逸詩人の宗」という言葉は斉梁時代の言語習慣に合わないので，品語は後世の人により手が加えられたところがある。

上記の 4 点の内，2）について，曹旭氏は，確かに二蕭は陶淵明に対しての評価が高いが，蕭綱が「與湘東王書」で漢から斉梁までの詩文を論ずる時，列挙した詩人の中，『詩品』で上品の詩人は言うまでもなく，中品の詩人も何人か入れたのに，なぜか陶淵明に言及していないことと，蕭統の『文選』に収録した陶淵明の詩はただ 7 題 8 首で，曹（植），陸（機），謝（霊運），王（粲），沈（約），顔（延之），江（淹），謝（朓）（464～499）などと比べてみると少ない方であることとから考えれば，二蕭も陶淵明を第一流の詩人と見なしてはいなかったようだと分析

---

[29] 前掲『梁江文通文集』，28 頁

[30] 前掲『詩品詳解』，42 頁

[31] 前掲『梁江文通文集』，28 頁

[32] 曹旭著『詩品研究』「八，品語発微之二 ── 鍾嶸，二蕭與陶詩顕晦」，上海古籍出版社，1998 年 7 月，190～205 頁

[33] 銭鍾書著『談芸録（補訂本）』，中華書局，1984 年 9 月，91 頁

した。これは岡村氏と一致している。また，4）の意見については，「古今」と「隠逸詩人」という言葉は当時の言語習慣から考えても問題がないという結論を出した。ただ，1）の従来最も焦点となっているところについては，明確な論述はしていない。

この点について，袁行霈氏によれば，陶淵明に対する品語から見ると，他の中品の詩人は基本的に少なくとも一句ぐらいその不足なところを指摘する言葉があるのと違って，陶淵明の場合は一句も無く，すべて称賛の言葉で推奨しているのに，結局「中品」に置いた理由は，品語の冒頭の「其の源は応璩より出づ」にある，と考えられる。袁行霈氏は，「『詩品』のランク付けの方法を細かく考察してみれば，『上品』に置かれる者は，必ず『上品』の詩人を，或いは直接『国風』『小雅』や『楚辞』を源とする。例外は一つもない。応璩を『中品』に置いた以上，応璩を源とする陶潜も『中品』に置くしかなかったのである。陶淵明を高く評価した鍾嶸といえどもやはりその品等を変更することはできなかった。」[34] と述べている。このような見解は銭鍾書氏の『談芸録』にも見られる。袁氏はまた，陶淵明と応璩の詩のレベルの差を説明し，淵明も「中品」とした理由に疑問を呈し，それに反対する意見を持っている。

以上の先行研究からみると，陶詩について，斉梁時代では『詩品』の「中品」という評価は世間の一般的な評価であり，『詩品』より前に書かれた「雑体詩」にもそのような評価が見られるという岡村繁氏の意見について，鍾嶸と江淹それぞれの陶淵明評価，『詩品』と「雑体詩」の関係，そして「中品」という評価の公平性などの課題がまだ存在するため，更に検討する余地があると考えられる。

二，本論

中国の古詩の世界における陶淵明の地位について，南宋の朱子（1130～1200）は「詩の根本準則」[35] として高く評価した。しかし，斉梁時代，鍾嶸の『詩品』によって付けられた「中品」という「レッテル」は長年に渡って議論されているところであるとはいえ，簡単には剥がせないようである。その理由を究明するため，この「レッテル」の由来，鍾嶸の陶詩評価の真相，そして，江淹における陶淵明像を考察してみよう。

---

[34] 袁行霈撰『陶淵明研究』，北京大学出版社，1997 年 7 月，137～161 頁

[35] 『朱文公文集』巻六十四「答鞏仲至書」，「至律詩出，而後詩之與法，始皆大変。以至今日，益巧益密，而無復古人之風矣。故嘗妄欲抄取経史諸書所載韻語。下及『文選』，漢魏古詞，以尽乎郭景純，陶淵明之所作，自為一編，而附于『三百篇』，『楚辞』之後，以為詩之根本準則。」（宋・朱熹撰『晦庵先生朱文公集　二』（上海商務印書館縮印明刊本），四部叢刊初編，集部，台湾商務印書館，1967 年 9 月，1177～1178 頁）

1. 斉梁の「一般の定評」

魏晋南北朝は政治上変遷の多い時期である一方，文学上も「変革」が激しい時期である。その「変革」の中心となるのは「文」と「質」の関係である。[36] 早くも春秋時代に，孔子はすでに『論語』雍也篇で，「文」と「質」の関係を述べている。「子曰く，質，文に勝てば則ち野。文，質に勝てば則ち史。文質彬彬として然る後君子なり。（子曰，質勝文則野，文勝質則史。文質彬彬，然後君子。）」[37]，と。「質」は内容上，実用性のこと，「文」は外形上，技巧性のことを指している。この両者への重視の度合いの変化により，各時代の詩風がある程度決まってくる。周から春秋時代にかけての間は『詩経』のような素朴で，穏やかな詩風であるのに対して，戦国時代末ころ，『楚辞』のような華やかで，強烈な表現が主流となった。漢代に入って，物語性に富んでいる楽府と五言古詩はまた「質」の方に重点が戻ったが，魏から西晋までの時期には，修辞主義，典故の多用，対句など表現上の工夫が盛んに行われ，さらに，六朝時代では，技巧を競い，艶麗な言葉を多用するようになり，「文」への関心が極めて高まった。その内，特に斉の韻律美への追求と梁の宮廷文学の隆盛が代表的で，「文が勝つて質が減る（文勝而質減）」[38] という時代に入っている。こういう時代における陶詩はまるで，宝石で飾られたシルクの服の中に紛れた粗末な麻布で作られた服のようであり，岡村氏が言う「一種の素朴な泥臭さ」，また杜甫（712～770）が言う「枯槁」[39] さを持っていて，その世界では「異質」な存在だと言える。

魯迅は「魏晋風度及文章與薬及酒之関係」において次のように述べている。

> 近代的な文学観で見れば，曹丕の時代は，「文学の自覚時代」，あるいは，近代的な言い方で芸術のための芸術（ART for Art's Sake）という一派だと言ってもよい。[40]

曹丕の時代に起こり始めた「文学の自覚」は，根源としては「美意識の自覚」と言える。魏晋南北朝では，漢代に国教であった儒教の地位が低下し，道教思想が文人や貴族階層に慕われ，仏教もその勢力を拡大しつつあり，思想が多様になり，それに伴い，文献の種類が豊富になり，芸術に関する交流が深められ，人々の「審美」能力が向上し，「美意識」が自覚されるようになる。書道，絵画において多大な成果を挙げ，王羲之（303～361）や顧愷之（約 344～約 405）のような大家が現れたのはその一例である。ただ，「自覚時代」では，「美」への追求のために強

---

[36] 顔崑陽著『文学観念叢論』（正中書局，1993 年 2 月）の 2～93 頁「論魏晋南北朝　『文質』観念及其所衍生諸問題」を参考

[37] 『論語』（上海商務印書館縮印本），巻三，四部叢刊初編，経部，台湾商務印書館，1967 年 9 月，24 頁

[38] 明・胡応麟「漢人詩質中有文。文中有質。渾然天成。絶無痕跡。所以冠絶古今。魏人瞻而不俳。華而不弱。然文質離矣。晋與宋文盛而質衰。斉與梁文勝而質減。陳隋無論其質。即文無足論者。」（明・胡応麟撰『中国文学参考資料叢書　詩藪』，中華書局，1958 年 10 月，内篇巻二，21 頁）

[39] 唐・杜甫「遣興」五首「陶潜避俗翁，未必能達道。観其著詩集，頗亦恨枯槁。達生豈是足，默識蓋不早。有子賢与愚，何其掛懐抱。」（鈴木虎雄訳注『杜甫全詩集　第二巻「続国訳漢文大成」』，日本図書センター，1978 年 6 月，58～59 頁）

[40] 魯迅著，松井博光訳（代表）『魯迅全集 5　而已集・三閑集』，学習研究社，1985 年 4 月，116 頁

烈な表現方法を選ぶ傾向が強くなる。詩でいうと，内容の深刻さ，思想の深遠さを求めるよりは，形式上，つまり「文」の美を追求する方が刺激的で，効果的である。従って，華麗で，艶冶な詩が生まれ，流行するようになったのである。

また，自覚の深化に伴って，文学においての活動は作品創作だけに集中するのではなく，文学批評に従事する人も増えている。近藤春雄氏が「詩品の文学論」において次のように述べている。

> 文学に対する好悪の情が更に何故によいか何故に悪いかといつた形に於いて自覚作用を伴ひ，そこに知性の判断が作用する時，所謂文学批評なるもの々成立を見る事は言を俟たない。品第を主とする鍾嶸の『詩品』が，かゝる何故によいか，何故に悪いかといふ自覚作用に覚醒すると共に，そこに品第の標準を示さんとしてゐることは蓋し当然のことである。[41]

従って，魏晋南北朝には文学批評，作品収集に関する著作が頻出する。曹丕の「典論・論文」，陸機の「文賦」，劉義慶（403～444）の『世説新語』，蕭子顕（487～537）の『南斉書』にある「文学伝論」，劉勰（約 466～約 532）の『文心雕龍』，鍾嶸の『詩品』，蕭統の『文選』，徐陵（507～583）の『玉台新詠』等々が相次いで現れてきた。この中，斉梁の著作で見ると，陶淵明が対象とされたのは『詩品』と『文選』及び『玉台新詠』だけであり，『詩品』における「中品」というランク付け，『文選』に収められた 7 題 8 首と『玉台新詠』に収められた 1 首から見ると，「質直」[42]である陶詩は確かに当時の一般評価では一流詩人と見られていないことが分かる。

興味深いことに，貴族階層が文学の中心となる斉梁時代，銭鍾書氏の指摘する通り，当時唯一陶淵明のことを理解している人物は貴族の中で最も発言力のある昭明太子蕭統と簡文帝蕭綱の二兄弟であった。

岡村氏は蕭統の陶淵明評価について次のように述べている。

> 昭明太子の淵明に対する態度をながめてくると，殊のほか隠者を尊重した当時の社会的風潮もさることながら，太子は隠者として主観的にほぼ理想化された淵明観に立って，その人徳をこそ思慕し，その人徳を偲ばんがために，その詩文を愛好していたもののように見受けられる。だとすれば，淵明に対する太子のこうした求道的な態度は，文学の創作という有閑事に結びつくよりも，むしろ道徳的・政治的な風教の面にこそ直結する性質のものであったといえよう。[43]

蕭統の陶淵明評価は，「人」をメインとし，その「文学」を愛好したのもその「人」を高く評

---

41 近藤春雄著『東亜研究講座第九十五輯　支那文学論の発生―文心雕龍と詩品―』，東亜研究会，1940 年 12 月，50 頁

42 『詩品』陶潜の品語「世嘆其質直」（前掲『詩品詳解』，66 頁）

43 『陶淵明：世俗と超俗』，46 頁，傍点は原著書による

価したからである。確かに，蕭統は「陶淵明集序」において，陶淵明の人徳への思慕を明白に表明したが，「人徳を偲ばんがために，その詩文を愛好していた」という因果関係が成立するかどうかはまだ検討する余地がある。同序には次のように言う。

> 余，其の文を愛嗜して，手を釈く能はずして，なほ其の徳を想へば，同時ならざるを恨む。（余愛嗜其文，不能釈手，尚想其徳，恨不同時。）[44]

手から離せないほど，文を愛読している上に，更にその徳を思い，その人と同じ時代に生まれなかったことを残念に思うというのである。蕭統は，「文」と「徳」を完全に分けて考えてはいないが，あえてどちらが先であるかと言うと，「文」の方に先ず惹かれたのではなかろうか。

実は，「陶淵明集序」の中に，陶詩についての極めて高い評価が見える。

> 其の文章は群せず。詞采は精抜なり。跌蕩昭章にして，独り衆類を超ゆ。抑揚爽朗にして，之れと輿に京いなるは莫し。素波を横ぎりて，流に傍ひ，青雲を干めて，直上す。時事を語れば，則ち指して想ふべし，懐抱を論ずれば，則ち昡らかにして且つ真なり。加ふるに志を貞して，休まず，道に安んじ節に苦しみ，躬耕を以て恥と為さず，無財を以て病と為さざるを以てす。大賢にして，志を篤くし，道とともに汚隆するに非ざるよりは，孰か能く此の如き者ならんや。（其文章不群，詞采精抜。跌蕩昭章，独超衆類。抑揚爽朗，莫之輿京。横素波而傍流，干青雲而直上。語時事則指可想，論懐抱則昡而且真。加以貞志不休，安道苦節，不以躬耕為恥，不以無財為病，自非大賢篤志，輿道汚隆，孰能如此者乎。）[45]

上記から見ても，蕭統は陶の詩風の「不群」，言葉の「精抜」，韻律上の「爽朗」，また内容の変化，主旨明白等々，全面的にその「文」が優れていることを称賛している。さらに，加えて人徳の方でも「大賢」の徳があり，「文学」と「人格」が兼ね備わっているとなるが，「詩文をよすがとして，その人徳をこそ思慕しようとする」[46] までは言えないのであろう。

また，詩の「文」と「質」の関係について，蕭統は「答湘東王求文集及『詩苑英華』書」において次のように述べている。

> 夫れ文は典なれば，則ち野を累ひ，麗なれば，亦た浮を傷む。能く麗にして浮ならず，典にして野ならざれば，文質彬彬として，君子の致有り。吾，嘗て之れを為さんと欲し，但未だ遒らざるを恨むのみ。（夫文典則累野，麗亦傷浮。能麗而不浮，典而不野，文質彬彬，有君子之致。吾嘗欲為之，但恨未遒耳。）[47]

孔子の思想を受けていて，「文」に傾いている潮流の中にいるにもかかわらず，「文」と「質」のバランスを重視し，自ら追求していることが分かる。それがために，彼は当時唯一陶淵明の

44　梁・蕭統撰『梁昭明太子文集』（上海商務印書館縮印本），巻四，四部叢刊初編，集部，台湾商務印書館，1967 年 9 月，28 頁

45　前掲『梁昭明太子文集』，巻四，28 頁

46　『陶淵明：世俗と超俗』，45 頁

47　前掲『梁昭明太子文集』，巻三，22 頁

理解者となったのであろう。『文選』には陶詩を７題８首しか収めていないが，陶の没後，最初に『陶淵明集』を編纂した彼が，当時の世間一般の陶詩評価に対抗していることは間違いのないのである。

一方，蕭綱の場合も同じく，『顔氏家訓』の文章篇には淵明の詩文を愛好していたという記述[48]が見えるが，これに対して，岡村氏の評価は次のようになっている。

> なかんずく，淵明の詩文を「机案の間に置き，動くときも静るときも輒に諷味していた。」という簡文帝は，一方では，上述の「内人昼眠を詠ずる詩」に見られるような，艶冶で巧緻な「宮体」の詩宗であった。一人の作家に見られる，この極端なまでに背反する異質な美への志向の交錯を，いったいわれわれはどう受けとめたらよいのであろうか。[49]

「宮体」というのは蕭綱を中心とする文学集団の指導者であり，蕭綱の文学上の先生でもある徐摛（474～551）より始まった文体である。『梁書』の徐摛列伝によると，「文を属りては好んで新変を為し，旧体に拘らず。……摛の文体は既に別にして，春坊尽く之れを学び，『宮体』の号，斯れより起こる。（属文好為新変，不拘旧体。……摛文体既別，春坊尽学之，『宮体』之号，自斯而起。）」[50]「宮体」は蕭綱の文学集団の主流となり，蕭綱自身の作品の中にもそれに染まったものが多い。『梁書』の簡文帝の本紀によると，「帝は雅に好んで詩を題す。其の序に云ふ，『余，七歳より詩癖有り，長じて倦まず。』然れども軽艶に傷み，当時は号けて『宮体』と曰ふ。（帝雅好題詩，其序云，『余七歳有詩癖，長而不倦。』然傷於軽艶，当時号曰『宮体』。）」[51]その地位と実際の創作活動を考えると，岡村氏が蕭綱を「『宮体』の詩宗」とまで評価するのも過言ではないと言える。ただ，彼がこの体裁を選んだことは当時の風潮に流され，それに従っている要素もあり，個人の文学観としては華麗な「宮体」以外のものをすべて排しているとは言えない。蕭綱の詩風について，明の張溥は「梁簡文帝集題詞」で下記のように評価している。

> 既に正に『宮体』，盛行し，但だ綺博のみに務め，軽華を避けず。人は曹丕の資を挟み，而して風は黄初の旧に非ず，亦た時世然からしめんか。（既正『宮体』盛行，但務綺博，不避軽華。人挟曹丕之資，而風非黄初之旧，亦時世使然乎。）[52]

才能としては曹丕にも匹敵するほどの資質があったが，やはり時代環境が変わって，世間全体から彼個人までの文風も次第に変質したということを指摘している。それにしても蕭綱の文

---

[48] 『顔氏家訓』「文章篇」，「劉孝綽当時既有重名，無所與讓；唯服謝朓，常以謝詩置几案間，動静輒諷味。簡文帝愛陶淵明文，亦復如此。」（顔之推撰『顔氏家訓』（上海商務印書館縮印本），巻上，台湾商務印書館，1967 年 9 月，23 頁）

[49] 『陶淵明：世俗と超俗』，44～45 頁，ルビは原著書による

[50] 『梁書』第二冊，巻三十，列伝二十四，徐摛（唐・姚思廉撰『梁書』第二冊，中華書局，1973 年 5 月，447 頁）

[51] 『梁書』第一冊，巻四，本紀第四，簡文帝（前掲，109 頁）

[52] 明・張溥編『漢魏六朝百三名家集・五』，中文出版社，1976 年 7 月，2579 頁

学観が，当時の文風をすべて良しとし，客観的，歴史的な視点が欠けているわけではない。例えば，彼の文学観についてよく取り上げられる「與湘東王書」では，次のように述べている。

> 但だ当世の作を以て，方古の才人を歴方するに，遠ければ則ち揚，馬，曹，王，近ければ則ち潘，陸，顔，謝，而して其の辞を遣ひ心を用ふるを観れば，了（いささか）も相似ず。若し今文を以て是と為せば，則ち古文を非と為す。若し昔の賢を称すべければ，則ち今の体を宜しく棄つべし。倶に「盍各」[53] を為せば，則ち未だ之れを敢へて許（ゆる）さず。……徒だ以（おもふ）に煙墨，言はざるも，其の駆染を受く。紙札，情無きも，其の揺襞に任す。甚だしきかな，文の横流，一（いつ）に此に至る。（但以当世之作，歴方古之才人，遠則揚，馬，曹，王，近則潘，陸，顔，謝，而観其遣辞用心，了不相似。若以今文為是，則古文為非。若昔賢可称，則今体宜棄。倶為盍各，則未之敢許。……徒以煙墨不言，受其駆染。紙札無情，任其揺襞。甚矣哉，文之横流，一至於此。）[54]

古今の文体が両立できないほど差が生じていることと，個人の文風が社会全体の文学環境に影響され易（やす）いことを指摘し，当時の詩風の発展状況を憂えている。彼が憂えている内容について『梁書』に収められているこの「書」のまえがきでは次のように書いてある。

> 斉の永明中，文士の王融，謝朓，沈約は文章に始めて四声を用ひ，以て新変を為す。是れに至りて転つて声韻に拘り，弥いよ麗靡を尚び，復た往時に踰（こ）ゆ。（斉永明中，文士王融，謝朓，沈約文章始用四声，以為新変。至是転拘声韻，弥尚麗靡，復踰於往時。）[55]

王融（467～493），謝朓，沈約（441～513）らより始まる声韻の拘りによる文風の麗靡への変質を蕭綱の此の「書」の動機と述べているが，「書」の内容から見ると，声韻についての議論はなく，主に当時の「京師文体」の「懦鈍殊常，競学浮疎，争為闡緩」[56] を批判し，「又た時に謝康楽，裴鴻臚の文に効ふ者あり，亦た頗る惑あり。何ぞや？謝客は言を吐けば天に抜け，自然に出づ。時に拘らざる有るは，是れ其の糟粕。裴氏は乃ち是れ良史の才，了も篇什の美無し。謝を学べば則ち其の精華に届かず，但だ其の冗長を得るのみ。裴を師とせば則ち其の長ずる所を蔑絶し，惟だ其の短なる所を得るのみ。謝は故より巧みなるにして階（のぼ）るべからず，裴も亦た質にして宜く慕ふべからず。……故に玉徽金銑は反つて拙目の嗤ふ所と為る。『巴人』『下里』は更に郢中の聴に合す。『陽春』は高くして和せず，妙声は絶へて尋ねられず。竟に錙銖を精討し，文質を覈量せず。巧心に異なるあり，終に妍手に愧づ。（又時有効謝康楽，裴鴻臚文者，亦頗有惑焉。何者？謝客吐言天抜，出於自然，時有不拘，是其糟粕。裴氏乃是良史之才，了無篇什之美。学謝則不届其精華，但得其冗長。師裴則蔑絶其所長，惟得其所短。謝故巧不可階，裴亦質

---

[53] 前掲『論語』，巻三，「公冶長　第五」，「子曰，盍各言爾志」，21 頁

[54] 『梁書』第三冊，巻四十九，文学列伝の庾肩吾伝（前掲，690～691 頁）

[55] 前掲，690 頁

[56] 前掲，690 頁

不宜慕。……故玉徽金銑，反為拙目所嗤。巴人下里，更合郢中之聴。陽春高而不和，妙声絶而不尋，竟不精討錙銖，覈量文質，有異巧心，終愧妍手。)」[57] と述べている。蕭綱は謝霊運や裴子野（467～530）を批判したのではなく，それぞれの「精華」「所長」を摂取し，その「糟粕」「所短」を棄てることを呼びかけ，盲目的な模倣を批判し，芸術としての文学の「陽春」「妙声」を追求するべきだと主張している。勿論，「巴人下里」より，「玉徽金銑」「陽春」の方が蕭綱の美意識に合っているが，「篇什之美」を追求する時に「文質を覈量」することも忘れていない。

曹旭氏と同じように，岡村氏もこの「書」において，蕭綱が古来の文人の名を列挙する際に陶淵明の名を挙げていないので，「文学の作家としては，淵明を顔延之や謝霊運ほどに高く評価していなかったことがわかる」[58] と指摘している。確かに，蕭綱は当時とそれ以前の文風を比較しているため，個人的な評価を挟まず，より客観的に当時世間一般に認められている「才人」を列挙している。しかし，これだけを根拠に，彼個人の陶淵明への愛好をも否定することはできないのではなかろうか。「時に拘らざる有る」謝霊運にも「精華」があり，「質」に偏っている裴子野にもその「長ずる所」があることを認めているように，陶淵明の「質直」と言われている詩文に潜んでいる「長ずる所」も見抜くことができるはずである。そして，彼の陶詩を愛好する理由として考えられるのは，その宮体詩と陶淵明の田園詩と美意識が通じていることであろう。

「文」と「質」の度合いとして，陶淵明の田園詩と蕭綱の宮体詩には明らかな差異が存在し，さらに，思想上，隠士の「淡泊名利」「安貧楽道」の思想と貴族階層の享楽思想との相違があることは言うまでもないが，詩の内容から見ると，いずれも「詠物」「叙景」を主としていて，両者には継承関係が見える。これについて，網佑次氏が『中国中世文学研究　南斉永明時代を中心として』において具体的に論述している。

> 永明文学の基づく所を案ずるに，晋宋の交，始めて，陶潜，謝霊運らに拠るところの田園や山水の叙景詩が成り，ついで詠物詩的の作も，次第に現はれたが，宋の鮑照に至っては，叙景詩，および詠物詩的のもの（猶ほ，言志抒情の気味が，かなり強い）が多い。（中略）以上は，永明文学の源流であるが，次にその展開に就いて言へば，永明文人に拠って，一応，その形を整へた詠物詩は，梁に入っては，数量　素材　構成　詩風など，何れの面にも，更に前進した。（中略）叙景詩は，梁の簡文帝に，全篇の叙景なるもの，および之に準ずる作が多い。[59]

陶の田園詩は郊野，田園の風景，自然の事物を詠じる対象としているのに対して，蕭の「宮

---

[57] 前掲，691 頁

[58] 『陶淵明：世俗と超俗』，47 頁，傍点は原著書による

[59] 網佑次著『中国中世文学研究　南斉永明時代を中心として』，新樹社，1960 年 3 月，415～418 頁，傍点は原著書による

体」詩は宮廷内の風景，閨房内の女性の姿態や心理，装飾している器物などを詠じる対象としている。その原因として，詩風の変化によることでもあるし，二人が生活している環境が異なるからでもある。ただ，感情，思想を表現するにあたって，単純な抒情，談論を叙べるのではなく，内から外に目線を移転し，景・物に感情を寄託，或いは純粋に景・物の美を詩の形で表現するという作詩の理念と詩における芸術としての美への認識は共通している。蕭は詩を創作する際に，陶詩の景・物に対して，観察する角度と描写する方法，または感情との結びつけ方などを参照していたとすれば，陶詩を「机案の間に置き，動くときも静るときも輒に諷味していた」と伝えられても不思議ではないだろう。

ただ，兄の昭明太子蕭統が『陶淵明集』を編纂し，その愛好を明白に表明したのと異なり，現存の簡文帝蕭綱の場合，顔之推の『顔氏家訓』の記述以外に，彼自身の文には，直接陶淵明に言及した言葉は見えず，その陶詩への愛好はごく個人的な範囲に限定されている。これは彼の所属する文学上の派閥[60] に関わっているのだけではなく，政治上の配慮もあろう。「與湘東王書」について，沈意氏は「梁代中期文壇之争的実質」という論文において，「蕭綱のこの手紙は古来彼の文学思想を反映している典型的なものと見られている。事実として，確かにそうである。しかし，事実はそれだけではない。彼はこの手紙を通して，敵を攻撃し，武帝を喜ばせると同時に盟友を得ることもできた。その政治才能を十分に表している。」[61] と評価している。「盟友」というのは湘東王蕭繹（508～555），宮体詩の主導者である徐摛，庾肩吾（487～551）らであり，いずれも蕭綱の政治勢力にとって重要な人物である。政治上の支持を得るためには文学主張上の一致を求める必要があり，彼は当時「異質」と見られている陶詩への愛好の表明に慎重であったと思われる。

以上，斉梁時代全体と梁の政治上・文学上も発言力の最も強かった二蕭の陶詩評価について考察してみた。陶淵明の「人」だけではなく，「文学」の面も理解し，愛好している二蕭ではあるが，斉梁時代の貴族階層のトップとして，その好みも個人の審美範囲に止まり，自分の地位を利用して，世間の陶詩への評価を変え，その影響力を拡大することまではできなかった。そ

---

[60] 沈意「梁代中期文壇之争的実質」（『貴州社会科学』第 205 期，2007 年 1 月，142～145 頁）によると，梁の文壇には 3 つの派閥があり，それぞれは復古派，折衷派と新変派である。復古派は裴子野を代表とし，文学の教化上の役割を強調し，「文」・「質」の関係において質に偏っている。折衷派は太子の蕭統をリーダーとし，「典にして野ならず，麗にして浮ならず，文質彬彬たる」文学を主張し，「文」・「質」の関係に対して折衷的な態度を取っている。新変派は晋安王に封じられ，後太子に即位された蕭綱を先頭とし，情性を揺蕩し，詞彩が華やかで麗靡な文学を追求していて，「文」・「質」の関係において，「文」の方を重視している。この 3 つの派閥はそれぞれの代表人物を中心として，3 つの集団となっている。

[61] 前掲「梁代中期文壇之争的実質」，145 頁

の原因として，やはり前述のように，「美意識」自覚の深化している段階であり，「文」の美を重視する風潮が流行っている時期であるため，彼らも簡単に個人の好みをもって，一般評価に介入し，導くことができなかったのであろう。

2. 鍾嶸の『詩品』における陶淵明評価

『詩品』の「上品」の詩人 12 人の中，作者不明の「古詩」以外，漢は 2 人，魏 3 人，宋 1 人であり，晋の詩人は潘岳，陸機，左思，張協と謝霊運の 5 人で，鍾嶸が晋詩のレベルを高く評価していることが窺える。具体的には「詩品序」により確認できる。

> 爾の後陵遅衰微して，有晋に迄る。[62] 太康中，三張・二陸・両潘・一左，勃爾として倶に興り，前王の武を踵ぎ，風流未だ沫まず，亦た文章の中興なり。（爾後陵遅衰微，迄於有晋。太康中，三張二陸，両潘一左，勃爾倶興，踵武前王，風流未沫，亦文章之中興也。）[63]

晋詩全体が評価される理由としては特に革新的な詩風を作り出したからではなく，いったん衰微した「風骨」を復興できたからである。それゆえ，晋の詩壇の代表人物が列挙される時も建安の詩壇と対比されるのである。

> 故に知る陳思は建安の傑為り，公幹・仲宣は輔為り。陸機太康の英為り，安仁・景陽は輔為り。謝客は元嘉の雄為り，顔延年は輔為り。斯れ皆な五言の冠冕にして，文辞の命世なり。（故知陳思為建安之傑。公幹仲宣為輔。陸機為太康之英，安仁景陽為輔。謝客為元嘉之雄，顔延年為輔。斯皆五言之冠冕文辞之命世也。）[64]

鍾嶸が晋の一流詩人を挙げる時，陶淵明を言及しないのに対して，同じく「中品」にランク付けしている顔延之を謝霊運と並べて，一流の詩人としている。これは当時の一般評価に合わせた評価である。

『南史』の「顔延之伝」によると，

> 是の時，議者は以へらく延之・霊運には潘岳，陸機よりの後，文士及ぶもの莫しと。江右は潘・陸を称へ，江左は顔・謝を称ふ。（是時議者以延之，霊運自潘岳，陸機之後，文士莫及。江右称潘，陸，江左称顔，謝焉。）[65]

興膳氏はこれについて，次のように評価している。

> 宋初の文学は，通常，顔延之・謝霊運によって代表されるというのが，六朝時代全般にかけての有力な認識だった。「爰に宋氏に逮び，顔・謝声を騰ぐ。霊運の興会標挙せる，

---

62 興膳氏の注「『爾後陵遅衰微』を前段の建安詩の条の最後につけ，この段を「迄於有晋太康中」（有晋の太康中に迄（いた）って）から始める読みかたも可能に思われるが，いまは通説にしたがっておく」，に従う。（『中国文明選第十三巻　文学論集』，34～35 頁）

63 前掲『詩品詳解』，5～6 頁

64 前掲『詩品詳解』，9 頁

65 唐・李延寿撰『南史』第三冊の列伝第二十四，「顔延之伝」，中華書局，1975 年 6 月，881 頁

延年の体裁明密なる，並びに軌を前秀に方べ，範を後昆に垂る」（沈約『宋書』謝霊運伝の論）。しかし，鍾嶸は二人の間にはっきりと序列を設け，謝霊運を上品のしかも最上位の詩人の一人とし，他方の顔延之は中品に置いた。長い中国の文学史を巨視的に俯瞰してみれば，たしかにこれは一つの見識であったといえる。後世にも謝の評価は一貫して高く，顔は次第に顧みられなくなった。[66]

鍾嶸の詩人の扱いにおいて，「詩品序」と『詩品』の本文とのずれが存在することが分かる。つまり，前者では世間の評価とできるだけ一致させるが，後者では彼なりの認識を織り込もうとしている。顔延之を「中品」に入れ，そして，品語で彼の欠点を明らかに指摘している。

其の源は陸機に出づ。巧似を尚ぶ。体裁綺密にして，情喩淵深なり，動もすれば虚散無く，一字一句にも，皆な意を致せり。又た喜んで古事を用ひ，弥いよ拘束せらる。秀逸に乖くと雖も，是れ経綸文雅の才なり。雅才の若き人より減すれば，則ち困躓に蹈まん。湯恵休曰く，「謝の詩は芙蓉の水より出づるが如く，顔は采を錯へ金を鏤むるが如し。」[67] と。顔は終身之れを病む。（其源出於陸機。尚巧似。体裁綺密，情喩淵深，動無虚散，一字一句，皆致意焉。又喜用古事，彌見拘束，雖乖秀逸，是経綸文雅才。雅才減若人，則蹈於困躓矣。湯恵休曰，「謝詩如芙蓉出水，顔如錯彩鏤金。」顔終身病之。）[68]

「尚巧似」は謝霊運にも用いられた表現である。その結果として謝の世間に言われている「逸蕩は之れに過ぎ，頗る繁蕪を以て累と為す（逸蕩過之，頗以繁蕪為累）」[69] という欠点をもたらした。そして，「喜用古事」について鍾嶸は序文で既に否定的な態度を示しており，その説明にあたり，顔延之の名を挙げている。[70] 最後に，湯惠休の言葉を借りて，謝と顔の間の差を強調するのも世間の見解と一線を画すためであろう。

上記のような世間一般の評価と鍾嶸なりの評価が共存していることは陶淵明の場合にも存在する可能性がある。「文学評論家」としての鍾嶸は世間の評価を無視したり，あるいは完全に背いたりすることはもちろんできないので，序文で晋の全体の詩風を称賛する内容の中では陶淵

---

66 前掲『中国文明選第十三巻　文学論集』，40 頁，ルビは原著書による

67 『南史』の「顔延之伝」には，「延之曾問鮑照己與霊運優劣，照曰，『謝五言如初発芙蓉，自然可愛。君詩若鋪錦列繡，亦彫繢満眼』」という記述があり，湯惠休の説は鮑照の説を踏襲した可能性がある。（前掲『南史』の「顔延之伝」，881 頁）

68 前掲『詩品詳解』，67 頁，傍線は筆者による

69 前掲『詩品詳解』，38～39 頁

70 「詩品序」「夫属詞比事，乃為通談。若乃経国文符，応資博古。撰徳駁奏，宜窮往烈。至乎吟詠情性，亦何貴於用事。『思君如流水』，既是即目。『高台多悲風』，亦惟所見。『清晨登隴首』羌無故実。『明月照積雪』詎出経史。観古今勝語，多非補仮，皆由直尋。顔延謝荘，尤為繁密，於時化之。故大明泰始中，文章殆同書抄。近任昉王元長等，詞不貴奇，競須新事，爾來作者，寖以成俗。遂乃句無虚語，語無虚字，拘攣補衲，蠹文已甚。但自然英旨，罕値段其人。詞既失高，則宜加事義。雖謝天才，且表学問，亦一理乎。」（前掲『詩品詳解』，42 頁）

明に触れていない。とはいえ，鍾嶸個人の陶詩評価は決して低い方ではない。「中品」というランク付けについて，後世では異論の多い点ではあるが，当時では陶淵明は主に隠逸者として挙げられ，『世説新語』や『文心雕龍』などの文学批評では対象とされてもいないという背景を考えると，最初に陶淵明を批評として取り上げ，「下品」ではなく，「中品」に入れ，そして単独に品語を付けたことは鍾嶸が陶詩の価値を見抜いていたことが分かる。さらに，その「品語」を深く咀嚼してみると，彼がその価値をアピールしようと努力したことも窺える。

> 其の源は応璩に出で，又た左思の風力に協ふ。文体は省静にして，殆ど長語無し。篤意真古にして，辞興婉愜なり。其の文を観る毎に，其の人徳を想ふ。世其の質直を歎ず。「歓言して春酒を酌む」，「日暮れて天に雲無し」の如きに至つては，風華清靡，豈に直（ただ）に田家の語と為すのみならんや？古今隠逸詩人の宗なり。（其源出於応璩，又協左思風力。文体省静[71]，殆無長語。篤意真古，辞興婉愜。毎観其文，想其人徳。世歎其質直。至如「歓言酌春酒」，「日暮天無雲」，風華清靡，豈直為田家語邪？古今隠逸詩人之宗也。）[72]

鍾嶸のこの「品語」は前述の蕭統の「陶淵明集序」の賛美溢れている言葉と比べたら，確かに一見平淡そうに見える。これをもって，鍾は蕭統ほど陶淵明の優れていることを理解していないという意見が多い。しかし，実は，蕭統の陶淵明評価は鍾嶸からの影響を受けていて，「陶淵明集序」と鍾嶸の「品語」とを比べると，評価はほぼ一致している。「余，其の文を愛嗜して，手を釈（お）く能はずして，なほ其の徳を想へば，同時ならざるを恨む」（蕭）と「其の文を観る毎に，其の人徳を想ふ」（鍾），また「時事を語れば，則ち指して想ふべし，懐抱を論ずれば，則ち昵（あき）らかにして且つ真なり」（蕭）と「篤意真古」（鍾），「其の文章は群せず」，「詞采は精抜なり」（蕭）と「辞興婉愜」，「風華清靡」（鍾）のように，表現上蕭統の方がより情熱を込めているだけであり，陶詩を称賛している点においては角度と内容が同じである。また，『詩品』全体を見ると，鍾嶸の作風がそもそも蕭統ほど華麗ではないし，一見平淡な言葉にこそ鍾嶸の「本心」が込められているところが見えるのである。その「本心」を具体的に言うと下記の 3 点が考えられる。

1）袁行霈氏の言った通り，ほかの「中品」の詩人は基本的に少なくとも一句ぐらいその不足なところを指摘する言葉があるのと違い，陶淵明に対しては一句も無く，すべて称賛の言葉である。これは顔延之の品語と比べれば分かることである。また，「中品」に限らず，「上品」の謝霊運，陸機ですら若干の否定的な言葉があるのは同じであり，ただ不足なところに対しての態度が異なるだけである。顔の場合，湯恵休の指摘に対して，鍾嶸はそのまま引用し，事実として挙げただけで，謝に対しては，次のように，世間の評価内容を事実として見ているが，個人的な考えとして，不足でありながらも正当な理由があることを説明した上で，ほかの優れている点も強調する。

---

[71] 前掲陳延傑氏の『詩品注』と周振甫氏の『詩品訳注』では「浄」となっている

[72] 前掲『詩品詳解』，65～66 頁

其の源は陳思に出で，雑(まじ)ふるに景陽の体有り。故に巧似を尚ぶ。而れども逸蕩之れを過ぎ，頗る繁蕪を以て累と為す。嶸謂ふに，若(かくのごと)き人，興は多く，才は高博，寓目すれば輒ち書す。内に乏思無く，外に遺物無し。其の繁富なるは宜(むべ)なるかな。然れども名章迥句は，処処に間起し，麗典の新声，絡繹として奔会す。譬へば猶ほ青松の澗木に抜き，白玉の塵沙に映ずるがごとく，未だ其の高潔なるを貶むるに足らざるなり。（其源出於陳思，雑有景陽之体。故尚巧似。而逸蕩過之，頗以繁蕪[73] 為累。嶸謂若人興多才高博[74]，寓目輒書。内無乏思，外無遺物。其繁富宜哉。然名章迥句，処処間起，麗典新聲，絡繹奔会。譬猶青松之抜澗木，白玉映塵沙，未足貶其高潔也。）[75]

「嶸謂」以下の内容は，謝霊運の欠点とされている「繁蕪」についての鍾嶸個人の見解である。「繁蕪」から「繁富」に変え，柔軟に世評に対して否定的意見を出して，他の称賛すべきところを強調している。こういう短所と長所とをあげて，後者の方に重点を置くという評価の方法は「上品」の陸機の場合も見られる。

其の源は陳思より出づ。才は高く，辞は贍(ゆた)かに，体を挙(こぞ)つて華美なり。気は公幹よりも少なく，文は仲宣よりも劣る。規矩を尚びて，綺錯を貴ばず，直致の奇を傷(そこな)ふもの有り。然れども其の英華を咀嚼し，膏沢を厭飫するは，文章の淵泉なり。張公の其の大才を歎ぜしは，信なるかな。（其源出於陳思。才高辞贍，挙体華美。気少於公幹，文劣於仲宣。尚規矩，不貴綺錯，有傷直致之奇。然其咀嚼英華，厭飫膏沢，文章之淵泉也。張公歎其大才，信矣。）[76]

「気」と「文」の面においては不足しているが，文章の底深いところを評価し，「大才」の賛辞にも賛成している。

謝霊運，陸機，顔延之と陶淵明それぞれの品語の構造を整理してみると，次のようになる。

謝：「源→不足（世評）→文学才能→長所→附注[77]」

陸：「源→文学才能→不足→長所→他者の好評」

顔：「源→長所→不足→他者の批判」

陶：「源→長所→人徳→不足（世評）→世評の否定→詩界の地位」

陶淵明の場合だけ不足を指摘しておらず，世間の批判的評価を挙げつつ，それを認めず，否定している。

---

[73] 前掲周振甫の『詩品訳注』と陳延傑の『詩品注』では，「繁富」となっているが，前後の文脈で考えると，「繁蕪」の方がより適切である。

[74] 前掲周振甫の『詩品訳注』と陳延傑の『詩品注』では，「嶸謂若人興多才高」となっている。

[75] 前掲『詩品詳解』，38～39 頁，傍線は筆者による

[76] 前掲『詩品詳解』，31 頁

[77] 『詩品詳解』の「補説」によると，「本文の末に十字の注が附いているが，他にかかる例は全くなく，原注なのか，それとも後人の箋注が竄入したものなのか，今明らかにし難い。」（前掲『詩品詳解』，40 頁）

いずれも不足なところを挙げているが，謝の場合，柔軟に批判し，陸の場合は補える長所を強調し，顔の場合は黙認する態度を取っている。陶に対してだけ，世間の批判を認めず，強く反対するという態度は特殊である。これこそ，鍾嶸自身の陶詩への高い評価の発露ではなかろうか。

2）陶詩が「文」と「質」を兼ね備えていると称賛している。

まず，「世其の質直を歎ず」をどう理解すべきか。「質直」というのは「地味で正直な様」で，つまり「質」が「文」に勝っている状態である。「歎」は「嘆」に通じ，「感嘆」「慨嘆」，つまり「賛美」する意味もあるが，「嘆息」つまり「惜しいと思いながら嘆く」という意味もある。中国と日本の『詩品』注釈の著作の中にも両方の解釈が見られる。

①「世人はみな彼の飾らない風格に深く感心している。」（興膳宏氏）[78]

②「世人はその質直なるを嗟嘆するけれども，」（高松亨明氏）[79]

③「世人は彼の質朴，正直であることを賛美している。（世人賛美他的質朴正直。）」（周振甫氏）[80]

④「世人は皆彼の作品が質朴で，率直すぎることを嘆惋（ため息をついて惜しむ）している。（世人都嘆惋他的作品過于質朴率直。）」（蕭華栄氏）[81]

⑤「世人は皆彼の作品が質朴で，率直すぎることを惋惜（痛惜）し，残念に思っている。（世人都惋惜他的作品過于質朴，直率。）」（禹克坤氏）[82]

上記の内，①②③は前者の意味を取っていて，④⑤は後者の意味を取っている。前者で取るのも通じるが，文脈で見れば，④と⑤の方がより自然である。前述のように，「質」より「文」の方を重視している斉梁時代の一般評価として，「質直」は決して感心される点ではないはずである。また，この文に続いて，陶の詩文をあげ，「豈に直に田家の語と為すのみならんや」と世人の評価に反対する立場に立っていて，「質直」として陶淵明の詩を概括することを不公平，不完全であると強く批判し，陶詩の「風華清靡」── 六朝時代で求められている「文」の要求をも満たしていると強調している。

それでは，鍾嶸の「文」「質」観を窺ってみよう。

「詩品序」では「文」と「質」の関係をもって，文学の変遷を論じている。

> 降つて建安に及び，曹公父子は篤く斯の文を好む。平原兄弟は鬱として文棟為（た）り。劉楨・王粲，其の羽翼為（た）り。次に攀龍託鳳，自ら属車を致す者有り。蓋し百を将つて計ふ。

---

[78] 前掲『中国文明選第十三巻　文学論集』，170 頁

[79] 高松氏の通釈によると，世人の嗟嘆する点が陶淵明の「質直なる」ところで，実は風華清靡の方が嗟嘆すべきだと理解しているようである。（前掲『詩品詳解』，65 頁）

[80] 前掲『詩品訳注』，65 頁

[81] 周偉民・蕭華栄著『「文賦」「詩品」注訳』，中州古籍出版社，1985 年 1 月，117 頁

[82] 禹克坤著『中国文化典籍，『文心雕龍』與『詩品』』，人民出版社，1989 年 11 月，153 頁

彬彬の盛，大いに時に備はる。（降及建安，曹公父子，篤好斯文。平原兄弟，鬱為文棟。劉楨王粲，為其羽翼。次有攀龍託鳳，自致於属車者。蓋将百計。彬彬之盛，大備於時矣。）[83]

漢の詠史詩の質素で文致のないのを批判し，建安文学の「文」と「質」ともに兼ね備えている，「彬彬たる」詩が満ちている盛況さを示している。

そして，詩人を評価する際にも，「文」と「質」の度合いが一つの基準となる。例えば，曹植について，

骨気は奇高にして，詞彩は華茂なり。情は雅怨を兼ね，体は文質を被むる。（骨気奇高，詞彩華茂，情兼雅怨，体被文質。）[84]

興膳氏によると，「『骨気』と『詞彩』，『雅』と『怨』，『文』と『質』のごとくさまざまな角度からみて，相対的な要素が，相互に排斥しあうのではなく，補完しあいつつ渾然と融合しきって長所を増幅している。」[85] 鍾嶸が「文」と「質」の均衡を重視していることが分かる。

総じて言うと，「文」を重視する梁の時代にあって，鍾嶸は詩観において，「文」と「質」を兼ね備えることを提唱している。彼は世間が嘆惋している「質直」には反対し，陶詩が「文」と「質」を兼ね備えているのことを示そうとしている。

3）隠逸詩における陶淵明の地位を肯定する。

最後の「古今隠逸詩人の宗なり」という評価について，意見が別れている。

まず，賛成する意見である。

善きかな，鍾氏の元亮を評するや。「千古隠逸詩人の宗なり」と。（善乎鍾氏之評元亮也，「千古隠逸詩人之宗也」。）（明・胡応麟（1551～1602））[86]

鍾嶸は陶詩を「応璩より出づ」と目して，「古今隠逸詩人の宗」と為す。論者は以て然りと為さず。然れども六義に沈酣するに非ざれば，宜なるかな此の語の確なるを知らざるや。（鍾嶸目陶詩「出于応璩」，為「古今隠逸詩人之宗」，論者不以為然。然非沈酣六義，宜不知此語之確也。）（清・王夫之（1619～1692））[87]

---

[83] 前掲『詩品詳解』，4～5 頁，傍線は筆者による

[84] 前掲『詩品詳解』，25 頁，傍線は筆者による

[85] 興膳氏はまた言う，「『骨気』が主として詩の内面性に向けられたことばである一方，『詞采』は外面的な表現の美しさについていう。……『雅』と『怨』は，相体的な二つの感情。雅が『詩経』風の中正を失わない平衡ある感情であるのに対して，怨は『楚辞』風の振幅の大きい激越な感情をいうのであろう。『怨』は，楚辞 ── 李陵系統の批評に特徴的な語であること，すでに李陵・班婕妤の項で述べた。一説に『史記』屈原伝の『国風は色を好みて淫せず，小雅は怨み誹りて乱れず』を引き，雅は国風の長所，怨は小雅の長所という。しかし雅・怨があい反する二つの感情であることは，この説でも依然として変わらない。」と（前掲『中国文明選第十三巻　文学論集』，99～100 頁）

[86] 明・胡応麟撰『中国文学参考資料叢書　詩藪』，中華書局，「外篇巻二・六朝」，1958 年 10 月，146 頁

[87] 清・王夫之著，船山全書編輯委員会編校『船山全書　第十四冊　楚辞通釈・古詩評選・唐詩評選・明詩評選』，「古詩評選　巻四　五言古詩一　漢至晋」，嶽麓書社出版，1996 年 2 月，716 頁

次に批判する意見である。

鍾嶸は陶を品するに，徒(ただ)隠逸詩人の宗を曰ふのみ。隠逸を以て陶を蔽ふ。陶，又た見るを得ざるなり。（鍾嶸品陶，徒曰隠逸詩人之宗。以隠逸蔽陶，陶又不得見也。）（明・黄文煥（1598～1667））[88]

余謂(おも)へらくは，陋(ろう)なる者や，斯の言は豈に以て之れを尽くすに足らんや。（余謂，陋者，斯言豈足以尽之。）（宋・胡仔（1110～1170））[89]

鍾嶸の謂ふに「其の源は応璩より出づ」と，説は固より拠無くして陋に近き，即ち謂ふに「古今隠逸詩人の宗と為す」は，亦た未だ陶の趣を尽くさず。（鍾嶸謂其源出応璩，説固無拠而近於陋，即謂為古今隠逸詩人之宗，亦未尽陶之趣。）（清・温汝能（1748～1811））[90]

賛成する意見は「隠逸」という評価が陶淵明の特徴を把握しているところに注目しているのに対して，批判している意見は主に，「隠逸」の面を強調することによって，陶淵明を「人徳」の面に限定し，その優秀さを全面的に取らないということを指摘している。

岡村氏の言う通り，陶淵明の「隠逸者」というレッテルは鮮明で，人格への思慕が古今一貫してメインとなっている。しかし，鍾嶸は「隠逸詩人の宗」と評価する目的として，文体，表現などにおいてのよさを明らかにした後，「隠逸詩」という文体において陶淵明の特別な地位を肯定しているだけで，陶淵明を「陋(せま)く」限定しているわけではない。さらに，序文では漢，魏，晋各時代の先頭に立つ詩人を列挙したが，「古今」にわたって，一つの「詩派」の「宗」とするまで尊ぶのは陶淵明についてのみ見える表現であり，これも極めて高い評価と言えよう。

まとめて言えば，『詩品』における陶淵明評価として，「詩品序」では世間一般の評価と合わせて，一流の詩人としては挙げていないが，品語では賛辞に溢れる言葉で，陶淵明を詩から人徳まで高く評価している。「中品」というランク付けについて，斉梁以降の時代から振り返ってみる時，不適正だと思う人が多いかもしれないが，当時の世間一般評価として「中品」どころか，もしかするといわば規格外であり，評価の対象ともされていない節もある。鍾嶸はそれに対抗し，陶淵明の再評価を試みているとも言える。

3. 江淹の「雑体詩」における陶淵明評価

前述のように，江淹の「雑体詩」は「文学批評」，「詩の列伝」の性質を帯びていて，彼の文学観は序文で表明されている。序文の冒頭でまず詩風の変遷について論述している。

---

[88] 明・黄文煥「陶詩析義・自序」，「古今尊陶，統帰平淡；以平淡概陶，陶不得見也。析之以錬字錬章，字字自奥，分合隠現，険峭多端，斯陶之手眼出矣。鍾嶸品陶，徒曰隠逸之宗；以隠逸蔽陶，陶又不得見也。」（北京大学・北京師範大学中文系教師同学編『陶淵明研究資料彙編』，中華書局，1962 年 1 月）

[89] 宋・胡仔纂集，廖徳明校点，『中国古典文学理論批評専著選輯，苕渓漁隠叢話　後集』，巻三「陶靖節」，人民文学出版社，1962 年 6 月，17 頁

[90] 清・温汝能「陶詩彙評自序」（清刻本『陶詩彙評』巻首）（前掲『陶淵明研究資料彙編』，221 頁）

夫れ楚謡・漢風，既に一骨に非ず。魏製・晋造，固より亦た二体なり。譬へば猶ほ藍・朱にて彩を成して，雑錯の変の窮まること無く，宮と商も音を為して，靡曼の態の極まらず。故に蛾眉は詎ぞ貌を同じくせん，而も倶に魄を動かす。芳草は寧ぞ気を共にせん，而も皆魂を悦ばすがごとし。其れ然るかな。（夫楚謡漢風，既非一骨。魏製晋造，固亦二体。譬猶藍朱成彩，雑錯之変無窮，宮商為音，靡曼之態不極。故蛾眉詎同貌，而倶動於魄。芳草寧共気，而皆悦於魂，不其然歟。）[91]

彼は文学がそもそも絶えずに変化しているものと考え，各時代にはその時代なりの文体，その時代なりの美の基準があることを認識している。そして，どの時代，どのような詩風でも，文学の「美」の外観は異なるが，人の「魄を動かす」，「魂を悦ばす」という根本的な目的あるいは効果を求める点で共通していると主張している。「文」と「質」の関係において，彼は文体，詩風といった「文」の変化が多様な美を達成する役割を肯定するが，人の「魄」・「魂」を感動させるという本質的なことをより重視している。

それゆえ，「世の諸賢各々迷ふ所に滞りて，甘きを論ずれば則ち辛きを忌み，丹きを好めば則ち素きを非（そし）らざる莫きに至りては，豈に所謂方に通じて恕を広め，遠きを好みて兼愛する者ならんや。（至于世之諸賢各滞所迷，莫不論甘而忌辛，好丹而非素，豈所謂通方広恕，好遠兼愛者哉。）」[92] と世の人の文学評価にあたって，ある基準にこだわり，それに合わないものをすべて排除したり，あるいは「遠きを尊び近きを賤し」[93] んだりする弊害を指摘し，目線を広げ，包容的な文学観を持つべきであると呼びかけている。

文学の時代性だけではなく，地域性にも気づいている。序文の後半には次のように述べている。

関西・鄴下，既已（すで）に同じきこと罕（まれ）なり。河外・江南，頗る法を異にすと為す。故に玄黄・経緯の辨（わかち）あり，金碧・沈浮の殊なることあるも，僕以為らく，亦た其の美を合わせ，善を並ぶるのみと。（関西鄴下，既已罕同。河外江南，頗為異法。故玄黄経緯之辨，金碧沈浮之殊，僕以為亦合其美並善而已。）[94]

王朝の交代，政治の都の変遷と伴って文学の中心も変わっていて，主流の文学には東西，南北の差が見えてくる。これを受けて，江淹の態度としては，それぞれに優れているところを取って，融合すべきであると考えている。

「雑体詩」の序で述べられている詩観について，銭鐘書氏は次のように評価している。

---

91 前掲『梁江文通文集』，28 頁

92 前掲『梁江文通文集』，28 頁

93 前掲『梁江文通文集』，28 頁

94 前掲『梁江文通文集』，28 頁。「関西」：前漢のこと。都は長安で，函谷関の西にある。「鄴下」：建安時の曹魏のこと。「鄴」が曹魏の都である。「河外」：西晋を指す。都が洛陽である。「江南」：東晋と劉宋を指す。都はみな揚子江の南にある建康である。

淹の此の数語は，韓愈の「進学解」に所謂「同工異曲」を標すが如く以て劉勰の『文心雕龍』の「知音」に所謂「知多偏好」を救ひ，藝の円く照して広大に教化（catholicity）することを談ぜんと欲するのみ。（淹此数語，如標韓愈「進学解」所謂「同工異曲」，以救劉勰『文心雕龍』の「知音」所謂「知多偏好」，欲談藝之円照而広大教化（catholicity）耳。）[95]

文学批評にあたって，重要なのは，優劣をつけることではなく，時代，地域などの要素を全面的に考えた上でその差異を理解し，それぞれの美を見抜くことであるという江淹の詩観によれば，江淹はどうして詩人を比較し，品格をつけ，上下を分けるという文学批評を書かなかったのかが理解できよう。「雑体」という標題自体が各詩風，各文体に触れようということを意味している。また，三十家の詩人を無差別に，年代別にその名をメインタイトルとして並べ，それぞれの詩人の作品の特徴を要約し，サブタイトルにしているのも各詩人の「善」「美」を公平的に示すためである。当時，詩を模擬することが一種の潮流となっていて，ある詩人を擬する対象とすることは，その詩風，文体，表現などを肯定し，学びたいという姿勢を示している。自分の慕う対象を表明することは，その詩人の特有の詩風を推賞し，より広い範囲にその素晴らしさを知ってもらいたいという考えも込められている。鮑照の「学陶沢体」，陸機の「擬古詩」から彼ら自身の好み，詩風が見えるように，江淹もその「摹擬に善し」[96] という長所を活かし，彼が最も尊ぶ詩人を標榜し，その理由も擬詩の形で表しているのである。江淹より以前，個別に陶淵明を模擬するものもあったが，江淹になって始めて，多数の詩人に対して「品藻」[97] の対象に値する一人に選ばれている。これは陶詩の受容史において非常に重要なことである。

宋，斉，梁の三代に跨がる江淹は，劉宋から斉梁までの陶淵明の評価の変遷も知っている。彼は「方に通じて恕を広め，遠きを好みて兼愛する」詩観に基づき，世間の一般評価が低くても，それに流されないのである。「雑体詩」に陶淵明を取り上げることは後世の陶淵明像の形成に大きな影響を与えている。梁の時代で言うと，前述したように，「雑体詩」と詩観及び創作目的を異にする『詩品』が，江淹の模擬対象すべてを批評対象としたのは，文学世界の優秀な人物の選出に関して江淹と一致しているということである。後，鍾嶸から大いに影響を受けた蕭統は『陶淵明集』を編纂し，『文選』に陶詩を収録した。「雑体詩」が『文選』に収録されたことも間接的に陶淵明の受容にプラスの効果を発揮している。このように，陶淵明は文学批評者達の注目を集めるようになってきた。

江淹が陶詩を推賞する理由として，具体的には次の 2 点が考えられる。

1）「文」より「質」の方を重んじる江淹は陶淵明の詩風に親近感を持ち易い。

---

[95] 銭鐘書著『管錐編』（四），生活・読書・新知三联書店，335 頁

[96] 『詩品』江淹の品語（前掲『詩品詳解』，75 頁）

[97] 「雑体詩序」の最後の一文「今作三十首詩，敦其文体，雖不足品藻淵流，庶亦无乖商榷云爾」，江淹の所謂「品藻」はランク付ではなく，優れたものを選抜することである。

銭鐘書氏は江淹について次のように評価している。

按ずるに，斉梁の文士は青を取り，白に妃ひ，駢四儷六。淹，独り漢・魏の人の風格を見て，之れを悦び，時時心で摹し，手で追ふ。（按斉梁文士，取青妃白，駢四儷六，淹独見漢魏人風格而悦之，時時心摹手追。）[98]

また，『詩藪』によると，「文通の擬する漢の三詩は倶に遠し。独り魏文，陳思，劉楨，王粲の四作は之れを魏風に置くも辨ずる莫く，真に傑思なり。……文通の諸擬，乃ち遠く斉，梁の上に出づ。尺短あり，寸長あり，信に虚ならざるとなり。（文通擬漢三詩倶遠。独魏文，陳思，劉楨，王粲四作，置之魏風莫辨，真傑思也。……文通諸擬，乃遠出斉，梁上。尺短寸長，信不虚也。）」[99]

江淹は彼の生きていた斉梁の駢儷体のような形式を過度に追求する風格より，漢や魏の内面的なことを重視する詩人を慕って，その詩を擬した。「雑体詩」には漢から魏の詩人に対する擬詩 6 首があり，そのほか，魏の「学魏文帝」「効阮公詩」十五首という擬詩がある。『詩品』において曹丕は「鄙直」[100]，阮籍は「鄙近」[101] と評されているが，江淹は単独にこの二人の詩を擬したことから，彼と鍾嶸の文学批評上の微妙な差が見える。そして，江淹が，華麗な文風よりも素朴で内容を重視する詩人の方を好んでいることも分かる。陶詩は蘇軾（1037～1101）の所謂「其の外枯れて中は膏，澹に似て実は美（其外枯而中膏，似澹而実美）」[102]，文同（1018～1079）の所謂「文章は簡要にして惟だ華衰なるのみ，滋味は醇厚にして，是れ太羹なり（文章簡要惟華衰，滋味醇厚是太羹）」[103]，元好問（1190～1257）の所謂「一語天然万古新た，豪華落尽して真淳を見る（一語天然万古新，豪華落尽見真淳）」[104]，また「平淡」[105]「沖淡」[106] が最も多く言われている点で，「文」より「質」の方が充実していることが評価され，江淹の好みに相応しいのである。

2）江淹は隠逸の思想を持っていて，陶淵明の隠逸詩を特に好んでいる。

江淹は，寒門の出身にもかかわらず，その文才と機敏な処世術を発揮し，宋・斉・梁の三朝

---

98 前掲『管錐編』（四），333 頁

99 前掲『中国文学参考資料叢書詩藪』，144 頁

100『詩品』曹丕の品語「率皆鄙直如偶語」（前掲『詩品詳解』，49 頁）

101『詩品』阮籍の品語「洋洋乎会于『風』『雅』，使人忘其鄙近，自致遠大，頗多感慨之詞。」（前掲『詩品詳解』，30 頁）

102 宋・蘇軾「評韓柳詩」「所貴乎枯澹者，謂其外枯而中膏，似澹而実美，淵，子厚之流是也。」（宋・蘇軾著　顧之川校点『集部経典叢刊　蘇軾文集　上』，嶽麓書社，2000 年 8 月，206 頁）

103 宋・文同撰『丹淵集四十巻　拾遺二巻』（上海商務印書館縮印本），巻九，「読淵明集」，四部叢刊初編，集部，台湾商務印書館，1967 年 9 月，104 頁

104 元・元好問「論詩」三十首第四首「一語天然万古新，豪華落尽見真淳。南窓白日羲皇上，未害淵明是晋人。」（姚奠中主編　李正民増訂『元好問全集（増訂本）上』，山西古籍出版社，2004 年 1 月，269 頁）

に仕え，左遷と起用の繰り返しも経験し，王朝が頻繁に交代する乱世の中，危機を乗り越え，最後に梁の金紫光禄大夫という顕官の地位を確保できた。官僚生活の浮き沈みの中で戦い，諦めなかった彼ではあるが，その思想の中には隠逸思想が潜んでいる。

まず，陶淵明を擬する詩である「陶徴君田居　潜」[107]（以下「田居」と略す）で踏まえた陶詩はほとんど隠逸詩である。

種苗在東皐，苗生満阡陌。（苗を種へて東皐に在り，苗は生じて阡陌に満つ。）
雖有荷鋤倦，濁酒聊自適。（鋤を荷ふの倦有りと雖も，濁酒もて聊か自適す。）
日暮巾柴車，路闇光已夕。（日暮に柴車を巾ふに，路は闇くして光は已に夕なり。）
帰人望燈火，稚子候檐隙。（帰人は煙火を望み，稚子は檐隙に候つ。）
問君亦何為，百年会有役。（君に問ふ亦た何の為ぞと，百年会ず役有り。）
但願桑麻成，蠶月得紡績。（但だ願ふ桑麻の成りて，蠶月に紡績するを得んことを。）
素心正如此，開逕望三益。（素心は正に此くの如し，逕を開きて三益を望む。）

標題の「田居」は陶の「帰園田居」によるもので，語句の典拠は次のようになっている。

「東皐」：登東皐以舒嘯。（東皐に登りて以て舒嘯し。）（「帰去来兮辞」）[108]

「種苗」：種豆南山下，草盛豆苗稀。（豆を種ふ　南山の下，草盛んにして豆苗稀なり。）（「帰園田居」其の三）[109]

「荷鋤」：晨興理荒穢，帯月荷鋤帰。（晨に興きて荒穢を理め，月を帯びて鋤を荷ひ帰る。）（「帰園田居」其の三）[110]

「濁酒」：雖無揮金事，濁酒聊可恃。（金を揮ふの事無しと雖も，濁酒　聊か恃むべし。）（「飲

---

[105] 例えば，宋・曾紘「余曾評陶公詩語造平淡而寓意深遠，外若枯槁，中実敷腴，真詩人之冠冕也。」（宋・李公煥『箋注陶淵明集』（上海商務印書館縮印本），巻四，四部叢刊初編，集部，台湾商務印書館，1967年9月，49頁）；宋・葛立方「陶潜，謝朓詩，皆平淡有思致，非後来詩人怵心劌目彫琢者所為也。」（何文煥編訂『歴代詩話第十冊　韻語陽秋巻第一』，芸文印書館，1956年6月，291頁）；宋・朱熹「淵明詩平淡，出於自然，後人学他平淡，便相去遠矣」（宋・黎靖徳編『朱子語類』，巻百四十，正中書局印行，1962年10月，5340頁）；明・帰有光「已而観陶子之集，則其平淡沖和，瀟洒脱落，悠然勢分之外，非独不困於窮，而直以窮為娯。」（「陶庵記」，前掲『陶淵明研究資料彙編』，141頁）；清・施山「淵明為平淡之極品」（旧鈔本『漱芳閣叢鈔』巻一，前掲『陶淵明研究資料彙編』，238頁）

[106] 例えば，宋・秦観「陶潜，阮籍之詩長於沖淡」（四部叢刊初編，集部『淮海集』（上海商務印書館縮印本），巻二十二，「韓愈論」，台湾商務印書館，1967年9月，3頁）；明・王世貞「淵明托旨沖淡，其造語有極工者，乃大入思来，琢之使無痕跡耳。」（丁福保輯『歴代詩話続編』中，「芸苑卮言　巻三」，中華書局，1983年8月，994頁）

[107] 前掲『梁江文通文集』，巻四，32頁

[108] 前掲『箋注陶淵明集』，巻五，55頁

[109] 前掲『箋注陶淵明集』，巻二，16頁

[110] 前掲『箋注陶淵明集』，巻二，16頁

酒」其の十九)[111]

「巾柴車」:或命巾車,或棹孤舟。(或いは巾車を命じ,或いは孤舟に棹さす。)(「帰去来兮辞」)[112]

「稚子候檐隙」:僮僕歓迎,稚子候門。(僮僕　歓び迎へ,稚子　門に候つ。)(「帰去来兮辞」)[113]

「問君」:問君何能爾,心遠地自偏。(君に問ふ　何ぞ能く爾るやと,心遠ければ地自ら偏なり。)(「飲酒」其の五)[114]

「但願桑麻成」:相見無雑言,但道桑麻長。(相見て雑言無く,但だ道ひ　桑麻長ずと。)(「帰園田居」其の二)[115]

詩の構成として,主に,陶淵明の隠逸詩の中の代表作である「帰去来兮辞」「帰園田居」「飲酒」の三首から語句,要素を取り,綴り合わせている。この詩から,江淹の陶淵明作品の本質の一つが隠逸思想であるという認識が読み取れる。江淹の陶淵明評価も鍾嶸の所謂「隠逸詩人の宗」という評価と一致していることが分かる。

「田居」の陶詩との擬似性の高さは,陶淵明の連作「帰園田居」の一首として竄入し,蘇軾がそれを知らず,陶の実作の五首と一緒にこの詩も擬したほどある。[116] このエピソードから,彼の擬詩にける才能が見える一方,彼が陶詩を深く愛好し,その詩風から思想まで理解していたことも窺えるのである。

「雑体詩」の中,陶に擬する場合,専らにその隠逸の面を取り,他の詩人を擬する場合にも江淹の隠士への思慕が見える。例えば,「顧みて張仲蔚を念ふに,蓬蒿は中園に満つ。(顧念張仲蔚,蓬蒿満中園。)」(「左記室詠史　思」)[117],「高談して四時を玩ばんと,索居して儔侶を慕ふ。(高談玩四時,索居慕儔侶。)」(「張黄門苦雨　協」)[118] 等々がそれである。

次に,江淹の隠逸思想が彼の「自序」からも窺える。冒頭の部分で隠逸士である梁伯鸞や超俗的な人格を持っている友人袁叔明への思慕を述べている。そして,建平王劉景素を諫めたこ

---

[111] 前掲『箋注陶淵明集』,巻三,34 頁

[112] 前掲『箋注陶淵明集』,巻五,55 頁,現在の『陶淵明集』の各版本では「或命巾車」となっているが,『文選』李善注が引いた「帰去来兮辞」の文では「或巾柴車」となっている。

[113] 前掲『箋注陶淵明集』,巻五,54 頁

[114] 前掲『箋注陶淵明集』,巻三,30 頁

[115] 前掲『箋注陶淵明集』,巻二,16 頁

[116]「和陶帰園田居六首」の其の六(宋・蘇軾著,清・王文誥輯注,孔凡禮点校『中国古典文学基本叢書蘇軾詩集』第七冊,中華書局出版,1987 年 2 月,2106～2107 頁)。宋代の呉仁傑が書いた「陶靖節年譜」によると,「羲熙二年,丙午。有『帰園田居』詩五首。味其詩,蓋自彭沢帰明年所作也。……此詩今本有六首,韓子蒼云:『陳述古本止五首,俗本取江淹『種苗在東皐』為末篇,乃序行役,與前五首不類,東坡亦因其誤和之。』按江淹擬先生『田居』詩見『文選』。」(前掲『陶淵明研究資料彙編』,89 頁)

[117] 前掲『梁江文通文集』,巻四,30 頁,張仲蔚は晋の隠士である

[118] 前掲『梁江文通文集』,巻四,30 頁

とによって怒られて左遷された時，自然の中で悠然として過ごすことを楽しみにしている心境を表している。また，文末には次のように述べている。

> 人生は当に性に適(したが)ふを楽と為す。安んぞ能く意精にし，苦力し，身後の名を求めんや。故に少(わか)きより長ずるに及びて，未だ嘗て書を著はさず。惟だ集十巻のみあり，謂へらく此の如く足れりと。重(さら)に学は人の為にせず，交はりは苟合せざるを以てす。又た深く天竺・縁果の文を信じ，老氏清浄の術を偏へに好む。仕へて，望む所は諸卿二千石を過ぎず。耕織伏臘の資有れば，則ち隠る。常に願ふ，居を卜して宇を築き，人事を絶棄し，苑とするに丹林を以てし，池とするに緑水を以てし，左は郊甸に倚り，右は瀛沢を帯び，青春爰に謝(し)ぼめば，則ち武平皐に接し，素秋澄景なれば，則ち独り虚室に酌み，侍姫三四，趙女数人あらんことを，と。不(しか)ざれば則ち経紀に逍遥し，琴を弾きて，詩を詠じ，朝露幾間にして，忽ち老の将に至らんとするを忘る。淹の学ぶ所，此れに尽るのみ。（人生当適性為楽，安能精意苦力，求身後之名哉。故自少及長，未嘗著書，惟集十巻，謂如此足矣。重以学不為人，交不苟合，又深信天竺縁果之文，偏好老氏清浄之術。仕，所望不過諸卿二千石，有耕織伏臘之資，則隠矣。常願卜居築宇，絶棄人事，苑以丹林，池以緑水，左倚郊甸，右帯瀛沢。青春爰謝，則接武平皐。素秋澄景，則独酌虚室。侍姫三四，趙女数人。不則逍遥経紀，弾琴詠詩，朝露幾間，忽忘老之将至。淹之所学，尽此而已矣。）[119]

江淹が描いた理想的な帰隠生活の様子と陶淵明の「五柳先生伝」「帰園田居」「帰去来辞」等々の詩文で描かれているのとは異曲同工であると言える。江淹にとって，陶淵明の存在は，精神上の模範として，得失に対して恬淡な態度を取ろうとしていることがわかる。「自序」の他，「與交友論隠書」，「無為論」などの文からも，彼の隠逸に対する憧れが明らかに見えてくる。江淹の思想としては，儒教，仏教と道教から要素を取り入れている。そのため，長年の官僚生活の中でも，名利，財産に拘り過ぎず，「知足常楽」な一生を送ることができた。

以上のように，江淹の陶詩評価を考察してみた。まとめていえば，江淹は斉梁の「文」を過度に追求する詩風と異なっている陶淵明の「質」の面の充実に親近感を持ち，また，陶詩の本質である隠逸思想に魅了され，傾倒しているのである。こういう評価は彼個人の基準，好みに基づいているのであるが，彼が生きている時代の制約を乗り越え，斉梁以前の人格だけではなく，詩としても高く評価されている陶淵明評価を喚起しようと意図していたと思われる。鍾嶸が『詩品』作成にあたって江淹の「雑体詩」を参考にし，影響を受けた可能性は高いが，二人の詩観と文学批評の方法は異なっていて，『詩品』のランク付けの基準と同様に類推して，江淹の評価としても陶詩が「中品」程度とするとは思えないのである。従って，岡村氏の江淹「実際の評価は，だいたい『詩品』の品等づけと同様に，彼を『中品』程度の詩人と見ていた可能性が大きいように思われる」という見解はもっと慎重に考えるべきであろう。

---

[119] 前掲『梁江文通文集』，巻十，73 頁。前掲書では，「卜」を「幽」に作るが，『芸文類聚』によって改めた。

三，結論

本稿は，日本及び中国において大きな反響を呼んだ岡村繁氏の『陶淵明：世俗と超俗』から出発し，岡村氏の陶淵明評価の中で人格の面に集中しているのと違って，詩文そのものへの評価を中心に，その内容とその根拠を検証し，斉梁時代における陶詩評価を重点的に分析した。岡村氏は斉梁時代における陶詩はその前の時代と比べると評価が低く，一流の詩人として見られていないと述べた。根拠として，二蕭が人徳だけ慕っていること，鍾嶸の『詩品』における「中品」の評価などを挙げている。また，「雑体詩」で陶淵明の詩を擬した江淹も陶淵明を「中品」程度と見ている可能性が大きいと推測している。これに対して本稿では具体的な考察を経て，次のような三つの結論に達した。

①「質」より「文」の方を極端に重視する斉梁時代では一般評価として，陶詩は確かに評価されていない。ただ，二蕭の陶淵明評価として，蕭統の場合，人徳を思慕しているから，詩文も愛好するというのではなく，詩文そのものに対しても高い評価が見え，蕭綱の場合，「宮体詩」の主張者ではあるが，美意識として，陶詩と通じているところもあるので，その陶詩への愛好も十分可能性がある。

②『詩品』における「中品」のランク付けは，まず，陶詩をランク付けの対象に入れたこと自体に意義があり，さらに，品語から見ると，「文」と「質」の均衡を重視する文学観を持っている鍾嶸は陶詩が「文」と「質」を兼ね備えている点を高く評価しており，「隠逸詩の宗」という評価も彼の地位を肯定しているものである。

③『詩品』と「雑体詩」とでは，取り扱う対象及び陶詩への評価など一致している点が見える。ただ，江淹は「兼愛」の詩観を持っているので，ランク付けの意識はなく，江淹が陶淵明を「中品」程度の詩人と見ているとすることは難しい。「文」より「質」の方を重視している彼は陶詩の「質」の充実に親近感を持っており，彼の詩文に潜んでいる隠逸思想も陶詩からの影響を受けている可能性が高い。

おわりに

岡村氏の『陶淵明：世俗と超俗』が世に出て以来，その「特異」な意見により，われわれの従来の陶淵明像を否定しているところが多くの批判を受けている。その境遇はまさに斉梁時代における陶詩とある程度似ている。「一時代には一時代の文学がある」[120] と同じように，一時代にも一時代の文学批評があるはずで，伝統的，主流的な意見と異なる観点への反響から今の社

[120] 清・王国維著『宋元戯曲史』の「自序」，「凡一代有一代之文学：楚之騒，漢之賦，六代之駢語，唐之詩，宋之詞，元之曲，皆所謂一代之文学，而後世莫能継焉者也。」（商務印書館，1915 年 9 月，1 頁）

会における人々の陶淵明像への理解が窺える。そして，岡村氏の斬新な観点を客観的，歴史的に考察することによって人格及び文学においてもより立体的，全面的な陶淵明像が浮かび上がってくる。岡村氏が提唱した，固有の評価に拘らず，当時の時代の環境の下でその詩文，その人格をみることと，人と文学を，分けて考えるという文学批評観は，非常に価値のあるものであり，そしてその示唆性に富む意見を大切にして，深く吟味することは，これからの陶淵明研究にとって意義深いことである。

（ゆう　せい・言語文学専攻）